愛知工業大学研究報告
第２７号Ａ　平成４年

論　文

シュティフター『晩夏』（５）

Adalbert Stifters "Nachsommer". (5)

鈴木善平
SUZUKI Zenpei

Heinrichs Gang zur Selbst-Bildung steht ähnlich wie die Rosenzucht von Risach und wie das Handeln von den Vögeln in Beziehung mit den vier Jahreszeiten. Die Selbst-Bildung von Heinrich geht mit den Jahreszeiten zusammen glatt und günstig. Der Weg zur Selbst-Bildung ist dem jungen Heinrich günstig bereitet.

１．はじめに

『晩夏』は、一つには、ハインリヒを主人公とする教養小説であるとされる。しかしこのハインリヒの自己形成の物語には、教養小説とは趣をやや異にする点が見られる。先の拙論（４）で述べたように『晩夏』第一巻第三章・第四章によれば、ハインリヒの自己形成は、同類の者と出会いその者たちに親しく迎え入れられて進められる。異なった者、敵対する者と出会い、それとの葛藤や戦いを通して自己を形成して行くのではないのである。

教養小説は次のように定義されている。「一人の人間が、彼を取り巻く人間的・文化的環境との相剋のうちに、すなわち自我と世界との不断の折衝のうちに、自己を発見し内面的形成を遂げるにいたる過程を描く小説形式。」[1)]

ハインリヒを迎えたリーザハは、自然をよく観察し小さいものの偉大さについて考察している点において、ハインリヒと同じである。また絵画・家具等の趣味や日常生活の流儀において、ハインリヒの父と共通する。即ちハインリヒとリーザハは類を同じくし環境を同じくする者たちである。ハインリヒはリーザハとの交わりにおいて、「人間的・文化的環境との相剋」も「自我と世界との不断の折衝」も無しに自己形成を進めて行くことになる。相剋とは、対立・（矛盾）するものが相手に勝とうとして争うことであり、折衝とは、利害の一致しない者同士の間に行われる政治的な談判（かけひき）であるからである。[2)]

『晩夏』のもう一人の主人公ともいうべきリーザハには、かつてこの「相剋」のあったことが、第三巻第五章「回顧」に見られる。

ハインリヒの自己形成の場合、人間的・文化的環境とともに、自然が重要な場となっていることは、拙論（３）で述べた如く、第一巻第一章・第二章に見ることができる。本拙論（５）では、自然研究者ハインリヒが自然の四季の移り変わりとともに自己形成を進めて行く様を、第五章「別離」と第六章「訪問」によって見ていく。

「別離」は、ハインリヒが最初にリーザハの家を訪れたとき、二日二晩滞在したのちの別離を云い、「訪問」は、翌年の春再びリーザハを訪問することを云う。この「別離」と「訪問」の二つの章にも、春、夏、秋、冬の文字が多く見られることに注目したい。これらの言葉は、リーザハの薔薇の育成、薔薇の育成に関わる野鳥の行動、そしてハインリヒの自己形成の行為と結びついて用いられている。薔薇と野鳥とはハインリヒの比喩である。ハインリヒは「薔薇のように」リーザハの配慮を受け、「野鳥のように」四季折々を行動して自己形成に努める。

教養部

２．薔薇と野鳥の春夏秋冬

リーザハの三階建の家は、一階の壁から二階の窓まで薔薇の花で覆われている。薔薇は種類が多く、手入れが行き届き、花も葉も傷んでいるものが見られない。ハインリヒは別れるに先立ち、リーザハが薔薇を大切に扱い育てていることについて、リーザハにいろいろと質問し話を聞く。リーザハは言う、「薔薇を家の壁のところに植えたのは、若いときの思い出がこの花にむすびついているからです。またこのように育てるのがたのしみなのです。薔薇がこんなに美しく思われるのも、手入れにこれほど骨を折っているのも、全くそのためと思います。」[3]

四季折々の栽培・手入れについて語る所を幾つか挙げる。「ある年の春、私自身が育てた苗や業者から送ってもらった苗をやわらかな土に植えたのでした。（略）屋根の下には日除けとして亜麻布を張っておき、ちょっと引っ張ると花をおおうて弱い光だけを通すようにしました。こうして薔薇の木は暑い夏の太陽から守られ、花は有害な日光を受けずにすむことになりました。」[4]「枯れた木がないのはその前に抜いてしまうからです。何かの原因で急に枯れるときには即座に抜いてしまいます。同様に病気にかかった部分や勢いの衰えた部分は格子から切り取ります。一番良い時は春で、この頃は枝がむきだしになっています。（略）夏にも同じように欠陥のある葉や形の悪い花はすべて取り除くのです。」[5]「（薔薇やすべての樹々は）春になると幹と大枝はブラシと良質の石けんできれいに洗われます。洗うことは樹皮にとって有益で、（略）それに美しくもなります。」[6]　「どんなに慎重にしても樹の一部が風や寒さやその他の原因で枯れることがありますが、そういう場合は春に枝を下ろすときに駆除されます。」[6]もちろん冬の寒さに対しても薔薇は守られる。「壁の薔薇の木の上にはきれいな藁の被いがかけてある。」[7]

薔薇や樹々の葉や花に虫の害が見られない。「鳥たちがこの庭では毛虫や害虫を駆除するのです。彼らこそ人間の手やその他どんな方法よりもよく、樹木や灌木や小さな植物や、もちろん薔薇の花などの虫害を防いでくれます。」[8]　リーザハは、鳥たちが棲みついたり立ち寄ることができるように、餌や水や巣箱など種々の設備をする、そして鳥たちの行動を見守る。。「冬には幾種類かの鳥がここにますし、自然の餌がすっかり無くなる時もありますから、そういう時は引きとめておくためには完全に養ってやらなければなりません。このようにいろいろ手を尽くしましたので、春になって巣を作る場所を求めてきた鳥たちはこの庭に残りました。住み心地のよさがわかり、餌にありつけるのを知ったので翌年もまたやって来ました。冬の鳥はここを全く離れません。」[9]　「いつでしたか、冬に大枝が石のように凍りついているとき、あおげらが力一杯樹皮をつついて中から餌を取り出すところを見たことがあります。」[10]　「若い鳥はもう庭中を飛びまわって、秋の旅にそなえて練習をしています。」[11]　「歌う鳥たちは、出来上がった巣の中には、前に自分で作ったものでも他の鳥が作ったものでも、決して入りません。春がくる毎に新しく巣を作ります。」[12]鳥たちの四季折々の行動に応じて、鳥たちに対する世話もまた四季折々のものが行われる。「鳥は汚物と濁った空気が嫌いですから、不潔な巣箱には入りません。そこで、冬が終りに近づいて春のきざしが見えてくると、巣箱を全部とりおろして念入りに掃除して準備をします。冬の間にも樹の中に残しておくのは、居残る鳥が相当いて、巣を求めるからです。古い巣はときほぐして春になる頃新しいのを加えて、庭の中にまきちらしておきます。そうすると鳥たちは見つけて巣の材料にするのです。」[11]

以上、春、夏、秋、冬の言葉と共に述べられた薔薇の育成及び野鳥の行動またその世話の箇所を幾つか挙げた。リーザハに四季折々大切に育てられる薔薇は、リーザハに手厚くもてなされるハインリヒにほかならない。リーザハはハインリヒに、あなたは特別だと言っている。「私どもはお客をよく迎えますが、昨年の夏申上げたように、あなたはその中でも特に喜んでお迎えする方なのですよ。」[13]

３．ハインリヒの春夏秋冬

ハインリヒは、十八才の頃自然研究者となることを志したが、以来第二章「旅人」に見る如く、毎年夏になると自然研究の旅に出かけ、山地を歩いて山岳地帯の地表の観察・研究を続け、秋になると両親の家に帰り、冬は研究の整理や翌年の準備をし、春には再び旅への思いに駆り立てられる、という行動を年ごとに繰り返してきた。こうした行動を、まるで渡り鳥みたいにとハインリヒ自身が述べている。

「習慣とは不思議なものだが、私の場合も例外ではない。毎年秋になると家が恋しくなるのに、春が来るとまるで渡り鳥みたいに、去年の秋立去ったところへまた戻って行かずにはおられないのである。」[14] 雨宿りのために立寄った先がリーザハの家であったという出来事も、そうした旅の途中でのことであった。

以下、「訪問」の章に見られるハインリヒの行動で、春、夏、秋、冬の言葉と共に語られる箇所を幾つか挙げる。

ハインリヒはリーザハの家を立去った後、目的地の山脈に到着し、その山岳地帯に滞在して研究に取りかかった。「新しい滞在地にかなり長い間とどまっていた。（略）その後、山脈の谷の中にもっと奥深く入り、この夏には全然予定していなかった仕事まで始めた。秋おそくなってから家族の許に帰った。この旅はいつもの帰省の旅と同じだった。」[15]

「翌日から自分の部屋を冬の仕事のために整備しはじめた。」[16] 「書物はいつでも使えるように並んでいるし、器具や写生用具は冬に備えてきちんと揃っている。ところで、冬もかなり近づいていた。私たちの都に恵まれることの多い晩秋の晴れた日々も既に過去って、霧の多い寒い季節が始まった。」[17] ハインリヒの冬は、都会における生活の季節でもある。建築物を見る、劇場や美術館に行く、家に若い人たちやその両親たちを迎えたり彼らの家に招かれたりする。。

「私は都心に度々でかけて、大聖堂の古い建築を観察した。薔薇の家で建築物の絵を数多く見てから、建築が以前のように縁遠いものではなくなったのである。」[18]、

ハインリヒは、子供の時は芝居見物を許されなかった。一人前になってからは時折宮廷劇場へ行き父が選んだ作品を見るのを許された。独立して自由に行けるようになってからも、あまり関心がなく、以前見た作品を見る程度だった。「しかしこの秋からは変わった。宮廷劇場で上演を見たいと思う作品を自分で選ぶようになったのである。」[19] ある日新聞で宮廷劇場の『リア王』の公演を知る。評判の俳優だ。「季節はすでに冬に入っていた。仕事を都合して夕方宮廷劇場に出かけられるようにした。」[20] 彼は感動する。「翌日は、なによりもまず、父の蔵書の中からシェークスピアの作品集を借りて冬の間に読むため私の部屋に並べた。翻訳で読む必要がないように、また英語の勉強を始めた。」[21]

この冬はまた、人の顔を写生することに努めた。

写生ということについて、ハインリヒには次のような事情がある。「ある日ふと形態を描いてみようと思いついた。自然の対象物を言葉で記述するように、模写することもできるわけで、この方が結局はもっと良いのかもしれないと考えたのである。」[22] 絵を描くためには、事物をもっと詳しく観察しなければならない。高山に登り景色を眺めることを好んだハインリヒは、眼下の地形を良く観察して写生することから、山岳地帯の地表の形態を研究することを志すに至り、自然研究者となった。以来彼は地形に限らず様々なものを写生してきた。

ハインリヒは、この夏リーザハの家を辞して来る途中で、馬車に乗っている二人の女性に出会ったとき、「人間の顔こそ写生の対象として最も美しいものなのではないかと考えた。」[23] そして冬『リア王』の劇場で、近くの桟敷の少女を見てから「この考えがまた心に浮かんできた。人間の顔を研究してみたいという気になった。帝室美術館へ行って絵に描かれた美しい少女の顔を観察した。何度も出かけてそれらの絵を眺めた。（略）天気の良い冬の日に散歩に出かけて、たまたま出会った少女の顔を見ることもあった。」[21] 後には「男や老人や婦人の顔も描き、さらに人体の他の部分も、手本や石膏像が手に入る限り、描き始めた。」[24]

ハインリヒはこの冬は「とても忙しく、夜遅くまで起きていなければならない日が多かった。こうして冬は以前よりもずっと早く過ぎ去った。総じて私を満足させたのは、大都会でなければ容易に利用できない文化的施設であった。」[25]

冬から春への季節と自然の歩みに応じて、ハインリヒもまた春の行動に移っていく。

「春が次第に近づいてくると、旅行の準備に取りかかった。」[26] 「春が来るとまるで渡鳥みたいに去年の秋立去ったところへまた戻って行かずにはおられないのである。」[14] 薔薇の家を先に訪れるため今年は早めに出かける。「三月になって（略）旅行の準備もすっかり終わった。ある朝いつものように家族に心からの別れの挨拶を告げて旅立った。」[14] ハインリヒはリーザハに親しく迎えられる。今年も絵画や工芸品を見せてもらったが、見る目が進歩したことに気づく。「冬の間の稽古でどれほど絵を見る目が熟練したか、ほとんど信じられないほど

だった。去年の夏より、ずっとよく理解できたし、大部分の絵が気に入った。（略）（工芸品の鑑賞の点でも）私は去年の夏よりもずっと進歩したように思った。（略）多くのものが去年の夏よりもずっと気に入るようになった。気づかなかった色々な点に心が向くようになったのである。」[27]

リーザハの農場でも、四季折々の仕事が行われていて、昨年の夏よりも充実しているのが見られる。「道が乾いている時は、ときどき農場へ出かけた。春のはじめの仕事が精を出して行われていた。昨年滞在していたときと比べると、全体が非常に充実して秩序がととのっている。秋おそく冬までも、仕事ができる限り努めて働いたに違いない。」（略）農場の周囲の道や牧草地や畑も大部分は去年の夏とは変わっていて、道は白い石英をいれて堅め、きちんと区画がしてあった。」[28]

ハインリヒは、薔薇の家にかなり長く滞在したのち、目的地の山脈に向かって旅立つ。「次第に季節の変化が激しさを加えてきた。（略）春があふれるばかりの豊かさで始まった。前から旅に出ようときめていた時になったのである。」[29] 薔薇の花の咲く頃また来ることを約束した。「家の人々に挨拶をし、家の主人とグスタフとは家の前で別れを告げてから丘をおりた。庭の中や生垣の間や苗床から、もう鳥たちの力強い春の歌が聞えていた。」[30] ハインリヒは、今年もまた夏の山岳地帯における仕事に取りかかる。

４．結び、ハインリヒが手厚くもてなされることについて

「お招きくださる理由はわかりませんが、お言葉に甘えて喜んでお受けします。」[31] ハインリヒは最初の滞在の別離に際し、リーザハにこのように答えている。少し長いがその箇所を引用する。

老人はグスタフと共に庭の格子門のところまで来ると、一昨日私をいれるためにあけた格子門をあけて私を外に出した。二人ともいっしょに外に出た。私たちが薔薇の香りのただよう砂の広場に立ち止まると、家の主人は言った。

「では、ごきげんよう。（略）いつかまた、この近くにいらっしゃることがあってお立寄りくだされば、心からお迎えしますし、またわざわざお訪ねくださるのでしたら特別嬉しく思うでしょう。これは決して口先だけの儀礼ではありません。私は心にもないことは申しません。本当の気持ちなのです。もしよろしければ、いつでもお好きなだけ泊まって、自由におすごしになってください。私どもも自由に暮らしております。（略）」

「またお伺いする時には、ご親切にしていただけると思っております」と私は答えた。「お言葉もありますし、また、うわべだけおっしゃるような方とはお見うけいたしません。お招きくださる理由はわかりませんが、お言葉に甘えて喜んでお受けします。来年の夏はこちらへ来る予定はなくても、お訪ねしてしばらくお邸に泊めていただきたいと思います。」

「そうなさってください。きっと心からお迎えするのがおわかりになりましょう。長くいらしてもよろしいのですよ。」[32]

なぜ特別にもてなされるのか、ハインリヒにはわからなかったが、リーザハにはそうするわけがあったのである。

拙論（４）でふれたように、リーザハは、ハインリヒを最初に見たとき、養子グスタフの姉ナターリエの夫になる人かもしれないと思った。そしてこの姉弟の母マティルデこそ、リーザハの薔薇の花につながる思い出の人である。のち、二人の結婚式のとき、リーザハはナターリエに、私はお前のために本当に良い夫を選んだのだと言っている。それ故リーザハは、最初からハインリヒを特別な人に思い、大切な客としてもてなしているのである。

ところで、ハインリヒは、このとき二日二晩を過ごしたのであるが、リーザハの名前を知らないのである。「彼は私の名前を聞かなかったし、自分の名前も告げなかった。」[33] それゆえハインリヒは、左の引用箇所に見るように、リーザハのことを「家の主人」と言うのである。

更に二度目の訪問のときはかなり長く滞在したのにもかかわらず、やはり二人はお互いの名前を知らないままである。そのことを述べた箇所をここに引用する。

私は家の主人に、父や母や妹について、しばしば話した。私の家庭の状況についてなにからなにまで話し、父が自分の部屋で大切にしているものを出来るだけ詳しく何度も説明したが、私の名前を言わなかった。彼の方でもきかなかった。

彼の家にはもうかなり長く滞在しているのに、

私の方も家の主人の名前をまだ知らないのである。なにかの機会に名前が呼ばれることがなかったし、自分でも名のっていない。だから誰にもきかないことにした。グスタフやオイスタハにきけば一番簡単なわけだが、この二人には、特にグスタフにはききたくなかった。彼は何度も何気なしに彼を養父と言っていたからである。家の主人は私に対して好意的で親切である。自分の名前を言わないし、私の方で知っていると思っているとも断定できない。そういうわけで、どんなに遠く離れたところでも、薔薇の家の持主の名前はたずねまいと心にきめたのである。[34)]

名前を付け名前を呼ぶということは、特定化・個別化することであり限定することである。

ハインリヒとリーザハの出会いの、従ってハインリヒの自己形成の順調な歩みの、きっかけとなったのは、一つの空模様であった。この自然現象を見て自然研究者ハインリヒは、雷雨が来ると思い、雨宿りを頼むために最寄りの家を訪れた。その家にリーザハがいた。こうしてリーザハはハインリヒの訪問を受け、ハインリヒはリーザハの手厚いもてなしを受ける。そして二人とも、相手の名前を知らず相手の名前を呼ぶことがない。このことは、特定的・個別的なもの限定されたものにではなくて、全体的・普遍的なものに、われわれの思いを至らせるのにふさわしい。シュティフターの言う、自然と人間全体を支え、「人類のみちびきとなるおだやかな法則」がそれである。すなわち、「訪問」も「もてなし」も、ハインリヒまたはリーザハという個別的なもののなせるわざであるというよりも、「おだやかな法則」のなせるわざであると思わせるのにふさわしいのである。

１８４８年の三月革命とその後の混乱を体験したシュティフターは、１８５３年「石さまざま」を公にするに当たり、その「序文」において、「人類のみちびきとなるおだやかな法則」が世界を支えることを願った。

１８５７年に出版した『晩夏』においても、この「おだやかな法則」が自然と人間を導くことを願って、年ごとの四季の歩みのように順調なハインリヒの自己形成が語られていると思われる。

テキスト

Eben, K. und Müller, F.: Adalbert Stifter Sämtliche Werke VI, Gerstenberg Hildesheim, 1972. 以下ＳＷ　VIと略記する。

藤村　宏：シュティフター晩夏、集英社、東京、1986. 引用した訳文はこの書による。

注

1)　日本独文学会編：ドイツ文学辞典、河出書房、東京、1956. .

2)　金田一京助他：新明解国語辞典、三省堂、東京 1972. .

3)　ＳＷ　VI. S.156.
4)　ebd.　S.152f.
5)　ebd.　S.155.
6)　ebd.　S.160.
7)　ebd.　S.225.
8)　ebd.　S.162.
9)　ebd.　S.165f.
10) ebd.　S.170.
11) ebd.　S.176.
12) ebd.　S.177f.
13) ebd.　S.226f
14) ebd.　S.224.
15) ebd.　S.193.
16) ebd.　S.199.
17) ebd　S.200.
18) ebd.　S.203.
19) ebd.　S.206.
20) ebd.　S.207.
21) ebd.　S.215
22) ebd.　S.37.
23) ebd.　S.191.
24) ebd.　S.217.
25) ebd.　S.222f.
26) ebd.　S.223.
27) ebd.　S.240f.
28) ebd.　S.243f.
29) ebd.　S.246f.
30) ebd.　S.248.
31) ebd.　S.188.
32) ebd.　S.187f.
33) ebd.　S.188f.
34) ebd.　S.246.

（受理　平成４年３月２０日）